



どんなに大変でも、笑顔で。 その先に、成長があるから。

有限責任監査法人トーマツ 監査・保証事業本部 第三事業部 パートナー
藤春 暁子 Akiko FUJIHARU



2004年に公認会計士試験に合格しデロイト トーマツ グループの主要法人のひとつである有限責任監査法人トーマツに入社。グローバル製造業の会社が主な担当クライアント。2015年より、デロイト タイにて2年間赴任。2019年7月にパートナーに就任。

工学部出身のいわゆる“リケジョ”。公認会計士として働き、海外赴任も経験。現在はパートナーとなり、幹部としてのキャリアを歩み始めた藤春暁子さんに、資格挑戦から海外駐在、女性公認会計士としての夢、仕事をするうえで大切にしていることなど、様々なお話を伺いました。

科学から会計の世界へ

一公認会計士を目指された時期や理由を教えてください。

私は大学が工学部でしたが、「将来は何か資格を取って働きたい」と考えていて、在学中に公認会計士という資格を知り、試験勉強を始めました。色々な資格がある中で公認会計士を選んだのは「数学は得意だし、会計は数字を見ていく仕事だから、それを活かせるかな」、「理系の強みが活かせる資格なら、公認会計士だろう。」という、学生にありがちな単純な発想からでした。簿記などはわかりやすかったですが、会社法や民法などは「我ながら頑張ったな」という感じです。大学の授業とは大分かけ離れていましたが、違和感なく勉強できました。私が学んでいたのは量子力学ですが、難しいものではありません。流体力学の基礎を学ぶもので、プログラムを作り Enter キー

を押して、待っていると結果が出てくる。それを何回も繰り返シミュレーションしていくといったものでした。その結果を待っている時間などを会計の勉強に充てていました。大学4年生で合格し、卒業後は現在のトーマツへ入社しました。

一入社後はどのようなお仕事をされていたのでしょうか？

大学でいわゆるITに関係するような勉強をしていたためか、トーマツでは、監査の部署ではなく、IT専門家、IT系の部署に配属されました。そこでは、監査業務とIT業務を半々でやっていました。監査業務の中でITに関係する内部統制をみたり、企業のIT部署の方々に「どんな内部統制がありますか？」とインタビューをしたりもする仕事でした。

そして入社2年後、「公認会計士の仕事全体を俯瞰したい」と考えたので、監査の部署に異動しました。監査の全体を俯瞰しながら仕事できるのが、とても楽しかった記憶があります。私がチームのメンバーとして担当していたクライアントは、海外にも多数拠点を持っているかなり大きな製造業でした。金額的にも規模的にも重要な拠点を海外に持っていたので、日本だけでなく、海外子会社の監査チームともコミュニケーションする必要がありました。しかし、入社2、3年程度ではコミュニケーションを積極的にとれず、難しさも感じていました。まだ

若かったですし、ビジネスの全体像は見えづらく言葉の壁もあったので、上手く仕事がこなせるようになるまでは、結構苦勞しました。そもそも監査のこともまだよく分かっていないのに、海外の監査結果をああだ、こうだと議論なんてできませんよね。「監査とはなんぞや」「どういう手続きが必要で、何をすべきなのか」ということを自分なりに勉強して、みっちり監査の知識を増やしていきました。そうこうしているうちに、海外のメンバーと現地でもやり取りする機会もいただけるようになりました。

一英語はどのように学ばれたのですか？

海外志向を持っていたわけではありませんが、大学の授業や試験に必要な資料など、英語のものも少なくなかったので読み書きはある程度勉強していました。ただ、スピーキングはやはり難しく、苦勞しました。その時のスピーキングのレベルは、「帰国子女レベル」ではなく、一般的な平均レベルのスピーチ力でした。大学の勉強の中でやっていたことが、業務に使うためのツールとして必要になったという感じです。

2015年、コーディネーターとして赴任したタイでは、現地メンバーとの会話は基本英語だったので、やり取りする中で、スピーキングを磨いていきました。難しかったのは「こちらが伝えたいことをうまく伝える」ということです。現地

のメンバーには「こうした方がいいのでは？」という意見を受け入れてもらい、動いてもらわないといけない。「これはだめ」「こうしなさい」と否定したり命令したりするのは簡単ですが、それでは相手は動いてくれません。どういう言い方で、どうケアをして、いかに動いてもらうか、表現も含め、現地での仕事を通じて次第に英語力が身につけていったと思います。

「海外駐在する」ということ

ータイ駐在はいかがでしたか？

2015年から2017年の2年間、駐在しました。入社当時から携わっていたクライアントの子会社が何社もタイにあった関係で、現地の監査チームからも「来て欲しい」とリクエストをいただき、赴任することになりました。赴任に際して、不安はそれほどありませんでした。というのも、実は駐在前に、社内の短期プログラムでタイに2週間、シンガポールに1週間行く機会があったからです。そこで出会ったタイの現地メンバーは優しく、バンコクの治安もそんなに悪くない、と感じていました。行く直前に爆弾

事件があったりもしたのですが、まったく問題はありませんでした。向こうでは女性の公認会計士も多かったので、居心地が良かったです。男性に限らず、女性の中にも「日本に帰らずそのまま永住したい」という人も少なくありませんでした。事実、日本に帰らず現地に会計事務所を開業し、移住されている方もいらっしゃいました。私見ですが、「大手に頼むほどではないけど、困っているから何とか助けて欲しい」という日系企業はそこそこあると思うので、現地で仕事ができるくらいの需要はあるのではないのでしょうか。

駐在時の仕事は、監査チームに入らずコーディネート業務が中心で、私1人で約80社程度の会社を担当しました。数が数なので、1社にかけられる時間は限られてしまうため、それぞれにどうやって時間を割くかを考えるのは、想像以上に大変でした。それでも、コーディネート業務の枠を超えて、現地の日本人マネジャーの様々な相談に乗ったり、会社の課題解決につながりそうな税務あるいはコンサルティングサービスを紹介するといった業務にも、積極的に関わりました。

監査される側のクライアントに対してサポートするのは当たり前ですが、会計監査関連の日本語と英語の通訳や、監査

の論点をアップデートしたり、難しい論点を分かりやすく説明するといったこともこなしました。例えば、海外の日系企業の場合、経理をバックグラウンドとしない方が社長として赴任されているケースもあり、「これはこういう意味です」と説明するのは重要な仕事でした。そういう流れの中で「税務のことで困っている」、「こういうところを改善したい」、「こんなことがデロイトでできないか」など、会計監査以外の相談をいただくことも多く、それに対して提案をしていく業務は日本ではできない貴重な経験でした。

ータイで印象に残っていることは何ですか？

一番の思い出は、タイで一緒に働いていた監査チームが、デロイト アジアパシフィックの年間アワードを受賞したこと。東南アジアで最もリーダーシップがとれているということで、タイのメンバーが表彰されたんです。そこでいただいた盾を、「この賞は、日本からあなたがやって来て、うまくコラボレーションできた結果だから」と私にプレゼントしてくれたんです。本当に嬉しかったですね。今でもいただいた盾を大切にしています。

女性としての仕事、その価値観

ー今、公認会計士の仕事はどう変わってきたと思われますか？

私がトーマツに入社した当時は、最初の1年目はコピー取りやデータ入力など「考えずに手を動かす」、下積みの作業が多くありました。今はこうした作業はせずに「上がってきた結果を判断する」という業務の方向に変わってきています。データ作成については格段に効率的になり、時間の無駄もない。その分、公認会計士として短期間でステップアップができ、成長できると思います。「単純作業の中にも学べるものがある」という方も



いらっしゃいますが、私は公認会計士としてデータ入力から学ぶことはなく、アウトソースが簡単にできるものや、機械で対応可能なところは使えばいいと思います。私たちの時代の人間が経験したような事務作業をやらずに成長できるのは、若手にとっていい環境だと思います。ただ、作業などに必要だった時間が短くなり、求められる判断レベルもスピードも上がるので覚悟をちゃんと持っていた方が良いかもしれませんね。

一女性として、公認会計士の仕事をどう捉えていますか？

私は、海外駐在の際、夫を日本に置いて単身で行きました。夫は「無期限で行かれると困る」と冗談交じりに嘆いていましたが（笑）、女性単身でも海外での仕事に挑戦しやすいのは、公認会計士の魅力のひとつかもしれません。公認会計士は、業界の制度や仕組みの変化など、流れをキャッチアップしなければならぬので、長期間海外に行っていると、アップデートされた日本の状況のキャッチアップが難しくなります。だから、長くても4年くらいで戻ってくるのが一般的です。期間を決めて挑戦できて、日本に戻って来られる。加えて、社会と身近にいるクライアントの役に立っている、というモチベーションも代えがたいものだと思います。今はパートナーになったばかりで忙しいですが、落ち着いてくれば家族とのプライベートの時間をもっと持てるようになると思います。今は、シニアマネジャークラスになると仕事の負担が大きくて、「私にはできません」という女性もまだいますが、そこを改革するのは業界全体の課題ですし、それができれば確実に女性も増えていくのではないかと思います。幸い、女性の社会進出やライフステージに合わせた仕事環境の改善という意味では、今トーマツは先頭を切って取り組んでいると思いますし、公認会計士を目指している若い女性たちが現場に入る頃には、もっと良い環境になっているのではないのでしょうか。い



れにしても、公認会計士は「女性に向いている職業だな」と思っています。

一最近パートナーになられたとのことですが、やりがいは何ですか？

この7月にパートナーに昇格しました。それまではシニアマネジャーの立場で、監査先の現場の取りまとめをやっていましたが、今は現場の取りまとめをしているメンバーと一緒に方向性を決めていく仕事になりました。まだパートナーになりたてなので、やりがいは何かなどを考える暇もなく、新しいステージでの業務に翻弄されている感じです。「どうしたらもっと良くなるだろう」と、毎日悩みながら仕事に向き合っています。シニアマネジャー時代のように、どうしても現場感覚で細かく管理しがちになるので、意識的にそうならないように、俯瞰でモノを見る、考えるようにしています。また、パートナーになったことで私個人の時間単価はすごく上がりました。その分「私はそれに見合う価値をどのように提供できるだろうか」と自問自答しています。クライアントの役員や管理職の方と話をすることが一番の仕事になってきますので、その期待に応えていく、向き合っていくことが今の私の課題であり、少しずつでも結果が出ればやりがいに繋がるはずだと思っていますところ

一仕事をするうえで、大切にしている価値観は何ですか？

「どこでも楽しく働く」というのが一番大事なことだと思います。楽しくなければ、働く意味もありません。ただ、楽しくというのは「辛いことがない＝楽しみたい」という意味ではありません。「目の前の仕事にしっかりと対峙して、苦闘しながら働き、成長したい」という価値観は、入社してからずっと変わりません。これまでも、大変なことをひとつひとつ乗り越え頑張っていくプロセスを楽しんできました。仕事で色々辛いこともありましたが、「辛そうな顔をしている人と一緒に働きたくない」という思いが私の中にはあって、常に笑顔を忘れずに仕事することを心がけてきました。特に、タイにいた時はいつも笑っていたので、笑い声が聞こえないと現地のスタッフから「大丈夫？」と言われたりもしましたね（笑）。ポジティブでないと厳しいです、この仕事は。

(次頁に続く)



若手公認会計士たちへ

—若い公認会計士がいま身に着けるべきもの、知っていた方がいいことは何かありますか？

公認会計士は監査報告書を出すということを最終的かつ最低限やればよい仕事ではありますが、「とりえず監査基準に書いてあることさえやればいい」ということではないと思います。自分たちがやった業務で、ビジネスパートナーであるクライアントが良い方向に変わっていくことがやりがいに繋がると思いますし、そこに向き合いながらやっていくのが重要です。それは基準からだけでは学べませんし、経験だけでもありません。若手の公認会計士にはぜひ、クライアントと対話しながら、気づきを伝えていくとか、違和感を伝えていくといったことを毎日意識して仕事をしていただきたいと思います。

—若手の公認会計士、これから目指す学生にメッセージをお願いします。

監査は今、かなり変化してきています。その真っ只中にいる私もよく分からないくらいのスピードで様々な変革が起きて

いますから、「今まで求められてやってきたことをそのまま同じようにやればいい」というのではなく、柔軟に対応しながら一緒に仕事をしていく仲間が増えたらいいな、と思います。公認会計士は監査報告書を出すだけが仕事ではなく、やりがいのある、幅広い、奥行きのある仕事だと感じていただきながら、公認会計士という資格の価値を私たちと共有してもらえたら、嬉しいですね。

このインタビューは2019年9月12日に実施されました。



日本公認会計士協会

The Japanese Institute of Certified Public Accountants.

〒102-8264 東京都千代田区九段南 4-4-1
TEL : 03-3515-1120 (代表)
03-3515-1130 (国際グループ)
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>